

Buddhist Funerals of Eshinin and the Studio Shibaza of the Painting atelier of the southern capital

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹, Matsuo, Yoshiki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000498

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



恵心院本仏画粉本と南都絵所芝座

松尾 芳樹

京都市立芸術大学芸術資料館に所蔵される「田村宗立旧蔵仏画粉本」には、幕末期の律僧憲海の書写による粉本が多数含まれる。その中に、宇治にある恵心院の旧蔵仏画粉本39点を嘉永3年（1850）に書写したものがある。原本は、中世に南都絵所として活躍した芝座に関する粉本である。芝座は興福寺の一乗院門跡に従属する絵所のひとつであるが、資料に乏しく、その全体像は明らかではない。近世初頭に開かれた恵心院は、芝座と直接の関わりはないが、宇治白川の金色院を介して粉本は移動したと思われる。これら原本は、芝座の絵師、琳賢観重、侍従観深、中将観英によって描かれ、永正14年（1517）から元和5年（1619）までの年紀が見いだせる。時代の変化に翻弄されて衰退する絵所座の活動状況をうかがわせる資料として貴重である。憲海は、これらの粉本を六角堂能満院の仏画工房で制作に利用した。

主要項目：粉本 恵心院 白川金色院 南都絵所 芝座 大願憲海 琳賢 観重 観深 観英

Buddhist Funpons of Eshinin and the Studio Shibaza of the Painting atelier of the southern capital Yoshiki Matsuo

The museum of Kyoto City University of Arts has many Funpons, called The Buddhist Funpon Collection Sōryū Tamura Had, which priest Daigan Kenkai who lived in the last days of the Tokugawa Shogunate term copied. 39 sheets of the buddhist Funpons of Eshinin in Uji City copied by Kenkai in 1850 are contained in the Funpons. The originals were the Funpons about the Studio Shibaza which shows activity in the medieval times as the Painting ateliers of the southern capital. The Studio Shibaza is one of the Painting ateliers of the southern capital subordinated to Kōfukuji's Ichijōin sub-temple. As for those details, it isn't definite because described records are very small. Eshinin established in the early modern beginning has no relation to the Studio Shibaza directly. But, we can think that the funpons were moved through Konjikiin in Uji Shirakawa to there. Rinke Kanju, Jijū Kanshin, chujō Kanei who were the painter of the Studio Shibaza drew the original, We can find writing of the years to 1619 from 1517 in these Funpons. These are precious as the materials which show the activities conditions of the Painting ateliers of the southern capital which declined in the change in the age. Kenkai used these Funpons for the production in his studio of Rokkakudō Nōmaniin.

Key Terms: Funpon(Copies and Sketches for production of the the east Asian Style paintings), Eshinin, Shirakawa Konjikiin, the Painting ateliers of the southern capital, the Studio Shibaza, Daigan Kenkai, Rinke, Kanju, Kanshin, Kanei

〈田村宗立旧蔵仏画粉本と恵心院本〉

近世末期の仏教図像として、京都市立芸術大学芸術資料館に所蔵される「田村宗立旧蔵仏画粉本」⁽¹⁾は貴重である。京都六角堂能満院に住した僧大願憲海（1798-1864）が、生涯をかけて収集活用した粉本を中心としたこの資料群には、多くの情報が記録されている。概要はすでに、法蔵館発行の『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』⁽²⁾により紹介されていて、重複するが、後述する資料の解釈のためにその理解が必要なので、簡単に紹介しておく。

能満院は、六角堂の名で親しまれている天台宗頂法寺⁽³⁾の境内にあった僧院である。虚空蔵菩薩を本尊とする、真言宗智積院末のこの寺に仏画工房が開かれたのは、嘉永4年（1851）頃と思われる。工房には最盛期8人の僧を数える盛況を呈したといわれるが、元治元年（1864）7月、蛤御門の変による兵火により烏有に帰し、そのまま廃寺となった。憲海は寛政10年（1798）会津に生まれた。晩年使用した大願のほか、林岳、無言蔵などとも号している。青年期に豊山長谷寺で研鑽を積むが、天保3年（1832）河内長栄寺の黙住信正（1765-1833）に進具し、律僧として、宗派を離れた道を歩むようになった。一旦、会津八角神社の別当亀福院⁽⁴⁾に住したが、やがて弟子の大成（1828-1891）を連れて畿内に戻り、能満院に住して図像の収集とその流布に専心するようになった。元治元年の回禄で焼け出され、神泉苑南の蓮光院⁽⁵⁾に避難したが、被災後間もない9月にこの地に寂した。工房に蓄えられた図像粉本、版木類の多くはこの時焼失したが、絵本筆筒二棹分はかろうじて持ち出され、これらは、田村宗立（1846-1918）の手元を経て、現在の京都市立芸術大学の前身京都市立絵画専門学校に寄贈された。その総数は約2700点で、この内1割は木版墨刷である。現在も大半は使用された当時のまくりの状態で絵本筆筒とともに保存されている。

この粉本群のうちおよそ5割の作者が明らかとなっており、そのうち6割強は憲海の関与が確実な粉本である。憲海の書写した粉本には、特徴ある一群をなしているものがあり、嘉永3年（1850）1月28日から2月18日にかけて、精力的に模写されている「恵心院（蔵）本」と留書のある粉本も、そのひとつである。短期間の作業ではあるが、その数は39点にのぼり、複数の墨書に宇治とあるのでこの恵心院が、宇治市宇治山田にある朝日山恵心院のことであるのは間違いない。一時に多数を模写したにもかかわらず、中間に存在する模本の存在を推測させる記事がなく、憲海の他の粉本類の書写状況を考慮しても、恵心院所蔵本そのものを眼にして、これを模写したと考えてよい。模写は憲海ひとりで行っており、大半に「無言蔵」の署名と日付の書き入れがある。

この恵心院本模本の興味深い点は、「本云」として原粉本の墨書を書き写しているものが多く、その大部分は南都絵所、それも芝座に関わる記事であることだ。これらは中世の絵仏師に関する貴重な資料として注目してよい。別表のとおりこの粉本群に書き入れられた南都絵所関連の年紀資料を並べてみると、原粉本は、永正14年（1517）から元和元年（1615）まで、約百年の間に描かれたものとわかる。そこには、芝法眼観重、侍従観深、中将琳賢観英という三人の芝座の絵師の名を見ることができ、これは斎藤彦麻呂の『図画考』に示された芝氏系図⁽⁶⁾に一致して、16世紀の芝座の制作状況を概観できるものとなっている。

以下、この恵心院本の来歴を考察し、その資料性を紹介したい。恵心院本模本で、すでに

惠心院本年紀目録

年 紀			目録 番号 ※	名 称	筆 者	『仏教画像 聚成』の 図録番号
永正14	1517	5月19日	18	阿弥陀如来像	芝喜多坊觀重法橋	聚成-1136
大永4	1524	3月	29	地藏菩薩像		聚成-2102
享祿5	1532		★	奈良 東田薬師堂 薬師如来像胎内墨書銘	芝□□坊觀重法眼	
天文4	1535	5月	6	辨才天像		聚成-2211
天文5	1536	11月	34	毘盧遮那如来像		聚成-1163
天文5	1536	5月	★	奈良 東大寺 東大寺大仏縁起	芝法眼琳賢	
天文7	1538	2月20日	4	地藏菩薩像	芝喜多坊	聚成-2108
天文8	1539	2月19日	31	藏王権現像	觀重	聚成-4050
天文8	1539	5月	12	阿弥陀如来像	芝法眼喜多坊	聚成-1133
天文10	1541	6月20日	17	渡海文殊菩薩像	喜多坊	聚成-2069
天文14	1545	2月	★	愛知 妙伝寺本「涅槃図」	芝觀重法眼琳賢	
天文14	1545	3月	30	辨才天十五童子像	喜多坊	聚成-2216
天文15	1546	9月8日	★	奈良 能満院 天川弁才天曼荼羅	芝琳賢房	
天文18	1549	2月15日	★	奈良 唐招提寺 涅槃図	林賢	
天文18	1549	4月13日	11	阿弥陀三尊像	觀重法眼	聚成-1128
天文20	1551	6月11日	27	地藏菩薩像	喜多坊	
天文22	1553	3月3日	8	毘沙門天吉祥天善膩師像	喜多坊本	聚成-2199
天文22	1553	4月23日	7	十三仏図	芝喜多坊觀重	聚成-1183
天文22	1553	6月	★	奈良 春日大社 絵馬	琳賢	
永祿元	1558	4月5日	26	阿弥陀三尊来迎図	喜多坊本	
永祿8	1565	9月	39	十三仏図	喜多坊觀深	聚成-1184
(永祿8)	1565	9月	(10)	(十三仏図)	喜多坊觀深	聚成-1187
永祿13(長祿は誤カ)	1570	1月	25	兩童子像	芝絵所喜多坊侍従公觀深	聚成-4019
天正8	1580	10月18日	2	子島荒神像	右方芝絵所喜多坊觀深筆	聚成-4092
天正9	1581	10月18日	35	六地藏像	芝絵所喜多坊觀深	聚成-2115
天正10	1582	8月	16	辨才天像	右方芝喜多坊觀深	聚成-2210
天正16	1588	8月	28	地藏菩薩像	中将	
(天正17)	1589	7月27日	37	阿弥陀如来像	芝喜多坊觀深	聚成-1119
天正17	1589	7月27日	★	兵庫 大覚寺 当麻曼荼羅	喜多之坊 後琳賢觀深法眼及中将十五歳	
天正19	1591	1月	19	十三仏図	喜多坊琳賢	聚成-1186
天正19	1591	1月8日	13	文殊菩薩善財童子像	中将	聚成-2067
天正20	1592	2月	14	十一面觀音像(長谷寺式)	喜多坊	
(天正20)	1592	2月	(20)	(高野四社明神図)	芝絵所喜多坊觀深	聚成-4053
文祿3	1594	1月	5	十三仏図	右方喜多坊琳賢	聚成-1185
慶長7	1602	6月	20	高野四社明神図	南都芝絵所右方喜多坊中将觀英	聚成-4053
慶長14	1609	5月	32	十三仏図	南都芝之絵所喜多坊中将琳賢觀英	聚成-1189
慶長14	1609	5月	10	十三仏図	南都芝之繪所喜多坊中将琳賢觀英	聚成-1187
慶長14	1609	9月	21	文殊菩薩普賢菩薩像	右方南都芝之絵所喜多坊中将公觀英	聚成-2072
慶長20	1615	6月	15	地藏菩薩像	南都芝繪所喜多坊中将觀英	聚成-2104
元和元	1615	11月04日	36	僧形八幡神像	芝絵所喜多坊中将	聚成-4012
元和5	1619		3	愛宕権現像	南都左方絵所岡村大藏	聚成-4084

※目録番号は惠心院本模本仏画粉本目録の番号。()に入れたものは、惠心院本自身に記された原粉本の年紀。

★は参考として加えた觀重・觀深・觀英作品に見る年紀。

『仏教図像聚成』に収録された32点に未収録の7点を加え書写日順に一覧したのが付録の「恵心院本模本仏画粉本目録」である。また画像未公開の資料についてはその図版を収録した。

〈宇治朝日山恵心院〉

京都府南部、朝日山の麓、宇治川の辺に位置する恵心院は、現在真言宗智山派の寺院である。寺伝では、嵯峨天皇の弘仁13年（822）空海を開基とした龍泉寺をその創建とする。これは空海がこの寺地をして、唐の青龍寺の地勢に似ると観じて、命名したという。その後荒廃したが、寛弘2年（1005）比叡山横川の僧源信が、浄土信仰の道場として再興し、その名を朝日山恵心院と称するようになったと伝える。

しかし、近年の「恵心院文書」の調査などから、恵心院の開院は16世紀末のことであることがわかってきた⁽⁷⁾。恵心院に遺る木造の賢弘法印座像の胎内墨書に「宇治郡乘琳坊賢弘法印、逆修御影于時慶長季式丁酉八月上旬、七十七歳、造立之施主關東下野国茂木之住、権大僧都良泉恵心院住持当院開山仕、即爲末代令作之、弥勒院法印良泉敬白」とあって⁽⁸⁾、恵心院の開山が良泉という僧であることを記し、開院は慶長2年（1597）をやや遡る時期であることを示唆している。幕末期、慶応4年（1868）に恵心院が役所に届けた文書には⁽⁹⁾、良泉が真言僧であることと、恵心院が無本寺であることを記している。現在は智山末となっているが、近世にあっては本末は確立していなかったのであろう。

また良泉が開山の記念として座像を造立した賢弘という僧は墨書にもあるとおり、宇治白川金色院諸坊のひとつ乗琳坊の住持であったと考えられる。墨書から判断すると賢弘は永正18（または大永元）年（1521）の生まれということになり、恵心院文書から慶長5年（1600）までは存命が確認できる⁽¹⁰⁾。ただ、どの宗派に属していたかは明確ではない。

金色院の創建には不明瞭なところがあり、その存在が確認できるのは14世紀になってからである。寛正4年（1483）8月『金色院御堂再興勸進状』⁽¹¹⁾には園城寺の證朝を開基としており、その後も文書類には天台宗と記すものが多いので、天台宗であったと考えてさしつかえないが、近世には本寺を持っていない。嘉吉元年（1441）の『興福寺官務牒疏』⁽¹²⁾に「白河寺金色院」が収録されるところを見ると、中世には興福寺とも何らかの関係があったと考えられ、賢弘の出自については不明な点が多いのである。

中世以後宇治白川では茶の生産が盛んで、金色院の諸坊も製茶を副業としていた、中にはそのまま生業に転じてしまい、寺を廃して離れる者もあったというが、それだけに茶師との関わりを持つことが多く、乗琳坊賢弘もまた、有力な茶師で宇治郷の代官をつとめた上林家とのつながりが強かった。上林家は丹波上林郷を出自とし、早くから宇治での茶業に関わっていたが、天正期に久重・掃部丞の親子が宇治に移住して、茶師となったとされる。恵心院が開かれたのは、掃部丞すなわち上林久徳の時代であり、良泉と賢弘と上林家のつながりを示す文書も遺されている⁽¹³⁾。恵心院が上林家の祈禱寺という性格を持つことは否定しがたい。

慶長以後、徳川家光の乳母であった春日局の祈願を受け、幕府との繋がりを得たことや、上林家に関わる祈禱を行うなどして、寺勢は増した。このころ白川金色院の蔵坊の領地三十石が恵心院に宛てられ、実質恵心院が蔵坊を兼帯するようになり、小倉村にあったわずかな寺領と

ともに寺の経済の基盤としていた。しかし、祈祷寺であった恵心院の経営は寄進にたよるところが大きく、有力な寄進者の確保は重要事であった。その過程で、17世紀の半ば頃、先の寺伝のような由緒が成立したと考えられている⁽¹⁴⁾。もちろん、こうした由緒が全くの創作であると断定することは難しく、その原型となる伝説や草庵などが存在したとして不思議はないが、現在の恵心院とこれらを直接結びつける痕跡はない。従って「恵心院本」と憲海が記した粉本群の成立も、恵心院成立以後つまり慶長期以後と考えてよい。

〈芝座と琳賢〉

芝座についてはかつて森末氏によって詳細に考察され、吐田座、小南院座、吐田助座とともに南都絵所の中心的存在として、一乗院家に従属する絵仏所であることが、示されている⁽¹⁵⁾。大乘院家に属した吐田座には『大乘院寺社雑事記』⁽¹⁶⁾のような膨大な記録が遺されているのに比べ、一乗院家に属した、芝座、小南院座、吐田助座は、記録に乏しく、その歴史は断片的にしか確認しがたい。南都絵所という存在は給田を介した従属性を基盤に成り立っていたため、応仁文明の乱以後の、社会構造の変化は、当然のように彼らに影響を与えた。吐田座の衰退も含め、南都絵所諸座が中世末期、解体の傾向を見せたとする見解は異論のないところである⁽¹⁷⁾。

現在認識されている芝座の概略としては、次のようなものである。その出自は不明であるが、鎌倉時代中期に観実、室町時代中期に観深、観盛、観覚、観尊がいたことが知られ、その本流は観の字を冠したことから観派とも呼ばれる。また、庶流には慶の字を冠する一派のあったことも知られており、15世紀の末頃から慶舜（慶順）といった絵師の活動が見られる。16世紀には観重、観深、観英らが広く他山に仕事を求めて活動した。芝座の呼称はその住地が元興寺近くの芝の地であるところにちなむとされる。

かつては、天文5年（1536）制作の「東大寺大仏縁起」の作者芝法眼琳賢が吐田座の絵師と考えられたこともあり⁽¹⁸⁾、芝座についての認識のあいまいな状況が続いたが、近年は、資料調査や研究が進み、以前よりその実像がわかりやすくなっている。

まず、この芝法眼琳賢に関わる作例を見てみよう。彼の作品で最もよく知られているのは、先に示した奈良県東大寺所蔵の「東大寺大仏縁起」⁽¹⁹⁾である。東大寺の勸進僧祐全によって発願されたこの絵巻は「東大寺縁起」20巻の抄録本として制作された。各巻の奥書に「絵 芝法眼琳賢」と書かれており、『東大寺絵所日記』⁽²⁰⁾にも記事がある。かつては森末氏の見解に従ってこの琳賢を吐田座の絵師と見ることが一般であった。しかし、小松茂美氏はこれに疑義を持ち⁽²¹⁾、かつて森末説に従った河原由雄氏も、これを芝法眼観重という芝座の絵師であることを確認する⁽²²⁾などの経緯を経て、この芝法眼琳賢を芝座の絵師とすることが定着したのである。そこには、奈良県櫻井市の東田薬師堂の薬師如来座像の享禄5年（1532）の胎内銘に「絵所芝□□坊観重法眼」と記されている報告⁽²³⁾から、芝座の観重という絵師の存在が明らかになったことがある。

奈良県春日大社には、天文21・22年（1552・53）の春日社社殿造営の際に、その彩色に与った絵所絵師が奉納した「絵馬板」4面が春日大社に遺っている⁽²⁴⁾。板裏の墨書銘により、その

一は吐田座の琳圓有清、その二は吐田助座の介、その三は芝座の琳賢、その四は松南院座の帥公尊眺の作とされている。琳賢の名はただ「筆者琳賢」と記すだけで、そのため一時は琳賢が吐田座の絵師である証としてこの銘が利用されたこともあった⁽²⁵⁾。しかし、琳圓有清の銘には「自右方左方繪所五人 安居坊江一枚宛奉寄進由」また「左方繪所吐田琳圓」と記されており、左方が大乘院方の吐田座をさすとすれば、右方の絵師がそこに加わる必然があった。右方が一乗院方すなわち芝座、松南院座、吐田助座をさすと考えるならば、ここに芝座が加わって当然であり、琳賢を右方芝座の芝琳賢にあてることが、無理のない解釈と理解されるようになったのである。現在では、さきの「東大寺大仏縁起」同様に、芝法眼琳賢の作と鑑定されるに至っている。

こうした、既知の作品の再検討が進んだ背景には、近年の文化財調査の進展によって得られた新たな知見が、旧説の解消を求めたことがあった。

愛知県名古屋日蓮宗清長山妙伝寺に所蔵される「涅槃図」⁽²⁶⁾には、表具裏に正徳6年(1716)の銘文があり、併せて旧表具の裏書きおよび旧軸木銘を書き写した墨書軸がある。そのうち軸木銘とされる墨書に「御本尊南都絵所芝観重／法眼琳賢書之喜多坊／薬者笠坊口入／天文十四乙巳年二月吉日／多気大御所より□き志ん」と記されている。北畠晴具の関与の中で天文14年(1545)2月に芝観重法眼琳賢により制作された涅槃図があり、それが元亀3年(1572)2月に大徳山正覚禅寺(所在不詳)に寄進された。それが天正5年(1577)2月13日に妙伝寺に寄進され、正徳3年(1713)に表具の新調を行い、同6年(1716)に供養をしたものという。伝来がすべて明らかになっているわけではないが、軸木銘の記事の信頼性を裏付けるには十分であろう。「南都絵所芝観重法眼琳賢書之喜多坊」の墨書は、芝法眼琳賢が芝座の絵師観重であることを明確に示しており、年紀を伴うことで貴重である。

また、兵庫県大覚寺の「当麻曼荼羅」⁽²⁷⁾は、『多聞院日記』⁽²⁸⁾天正17年7月27日条及び同18年正月3日条にその経緯が記されている作と考えられており、表具裏に「筆者南都芝絵所喜多之坊 後琳賢観深法眼及び中将十五歳」と記されている。観深が『多聞院日記』に天正4年(1576)から登場する侍従であり、彼が琳賢の後継者であることと、その子中将の年齢がわかる墨書であり、本作が芝座の観深と観英の合作であることを示す。この墨書はまた、彼らに先行する芝法眼琳賢が芝座の絵師にほかならないことをも教えてくれる。ちなみに、ここに記された中将の年齢は『多聞院日記』天正14年3月13日条の記事「絵所侍従子十二才得度事申間」とも合致しており、中将観英が天正3年(1575)の生まれであることを、再確認することができる。

こうした琳賢に関する、共通認識の形成によって、奈良県長谷寺能満院の「天川弁才天曼荼羅図」⁽²⁹⁾も、奈良県唐招提寺の「涅槃図」⁽³⁰⁾も、芝法眼琳賢観重の作として躊躇がなくなった。前者には、旧表具裏に「筆者芝琳賢房 天文□□丙午九月八日」の墨書があって、天文15年(1546)にこの図を芝琳賢が描いたことが知られ、後者は、表具墨書銘に天文18年(1549)に「琳賢」が描いたことが知られていたが、芝座の琳賢の存在が確認されることで、その鑑定が容易となったのである。

〈恵心院本と芝座〉

恵心院本墨書の貴重な点は、観重、観深、観英の活動時期がかなり正確に把握できるところにある。もとより、転写された記録ゆえ、その記事が無批判に受け入れられるべきとは考えないが、その墨書も図像も、特に矛盾を感じる点はない⁽³¹⁾。

観重は永正14年(1517)5月法橋として粉本墨書(目録18)に現れ、しかも東大寺新禅院の本尊阿弥陀如来像の筆者であったことが記されている。「東大寺大仏縁起」を制作する二十年前から東大寺の絵事に関わり、しかも、すでに法橋であったことから、これ以前に何らかの功績をあげていたと考えられる。そして、『東大寺絵所日記』によれば琳賢は天文23年(1554)に東大寺八幡宮の彩色を行っているので、活動期は38年以上の長きにわたったことが確認される。

また、弘治3年(1557)6月に完成した京都市東山区禅林寺の「当麻曼荼羅図(顕貞曼荼羅)」⁽³²⁾が琳賢によって描かれたとする寺伝を認めるなら、その活動期間はさらに3年伸ばすことが可能だろう。

次いで、粉本墨書から観深が永禄8年(1565)9月十三仏図を描き(目録39)、天正20年(1592)高野山四所明神図を描いたこと(目録20)がわかるので、28年間の活動が確認できる。これは、『多聞院日記』において侍従の作画を示す記述が天正19年3月20日条「侍従へ立寄、天女書ヲ見了」を以て終了していることと、符号している。侍従の名は『多聞院日記』文禄4年(1595)正月5日条まで見えるので、この頃に芝座の当主が琳賢観英へと譲られたことが推測されよう。

だが、ここで注意しておかなければならないことがある。『尋憲記』をみれば、元亀2年には芝座の当主は侍従観深に移っていると見なければならず⁽³³⁾、粉本においても永禄年間以後琳賢観重のものは見あたらない。にもかかわらず、『東大寺絵所日記』の元亀3年の記事に「琳賢方」あるいは「琳賢」という記述があることである。従来この『東大寺絵所日記』の記述から芝法眼琳賢は元亀3年まで活動していたかに考えられているが、琳賢観重が永正14年に法橋として画事に当たっていることからすれば、元亀3年は55年後であり、年齢は70才を越していたことになる。絵所の当主として職を全うするにはいささか高齢にすぎると思われ、加えて弘治3年を最後に、琳賢の作画を跡づける資料もないこと⁽³⁴⁾から、この『東大寺絵所日記』元亀3年(1572)の記事に見える「琳賢方」あるいは「琳賢」の語が、観重その人を指すと考えることには疑問を禁じ得ない。実際ここでの用法は、作者を表すのではなく、仕事の家別分担についての記述である。先の大覚寺本「当麻曼荼羅」において観深を「後琳賢」としてわざわざ琳賢の名を使って表現していることから考えると、琳賢という名に個人を超えた意味を与えていたことをうかがわせるし、粉本において観重は、琳賢の名をほとんど使用しておらず、観重の時代、この琳賢の名には公的な役割があったのではないかと推測する。『東大寺絵所日記』は、芝座とはいいながら、庶流である助座の藤勝が書いたものであり、琳賢は他家の名であったため、このような使用があっても不思議ではない。琳賢という語に琳賢派とでもいうべき意味が宛えられる場合のあることは注意すべきであろう。

また、『多聞院日記』などによって天正3年(1575)の生年と天正14年(1586)からの作画活動が明らかな琳賢観英は、粉本に見る元和元年(1615)の墨書(目録36)によって、従来慶

長年間で考えられていた没年を、元和年間まで延ばす必要が生まれ、その活動期間はより明確となっている。

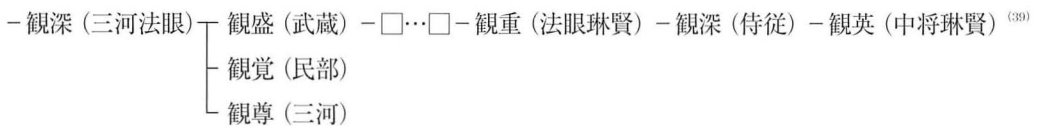
〈芝座の系図〉

このように、恵心院本模本の墨書によって、観重、観深、観英という三代の絵師の活動期間が明確さを増したために、従来から知られていた芝座の絵師との関係も、今少し積極的な推論を立てられるようになってきた。

興福寺東金堂内維摩居士像後屏台座天板裏面墨書銘中の長禄4年(1460)7月18日付けの墨書には、惣座一乗院方としての七人の絵師の序列が示されていて、一臈と七臈は小南院、三臈と四臈は京終が占めるが、のこる三人を二臈武蔵観盛・五臈民部観覚・六臈三河観尊と芝座が占めており⁽³⁵⁾、15世紀中頃の一乗院方絵所にしめる芝座の位置がうかがえる。

彼らに先行する絵師法眼観深については、大阪府守口市の佐太天満宮にある「北野天神縁起」⁽³⁶⁾の文安三年(1446)箱蓋裏朱漆書に「芝法眼観深之筆」とあるので、凡その活動時期がわかる。三河法眼観深と記す『増訂古画備考』⁽³⁷⁾では、彼の作という「子島真興像」を宝徳頃と記しているが、推測される彼の活動時期から考えて妥当な伝承である。観深を当時の芝座の当主と見ることに矛盾はない。しかし、長禄4年興福寺金堂内の墨書では、芝座の当主は武蔵観盛になっており、年少と思われる観尊が三河を称しているのが、観深はこれ以前に亡くなったか引退したと考えられる。従って、芝座の系譜として法眼観深から観盛の継承は認めてよいと思う。

また、観深の名の継承から、観重以後を、観盛の末裔とする可能性も高くなった。観盛については、東大寺の永和本四聖御影図が永和3年(1377)に美濃法橋観盛という絵師によって描かれたことが知られており⁽³⁸⁾、この一派においては、名の継承が少なからず行われた可能性がある。観尊については、観盛の子である可能性もあるが、活動期間に不明の点が多く、ここでは暫定的に観盛、観覚、観尊を兄弟としておく。法眼観深の活動期が15世紀前半であり、粉本の年紀から分かる観重の活動期が16世紀の前半であることから考えれば、観盛と観重の間には少なくとも二世代はいたと思われ、観深以後の系図は以下のように推測することができよう。



観盛から観重に至る数十年は、応仁文明の乱後にあたり、吐田座の衰退や松南院座の大乗院方への進出があり、芝座においては慶派の台頭も見られる時期で、南都絵所に大きな変化の生まれた時代である⁽⁴⁰⁾。この変化があればこそ、絵所の再構築に乗じて、芝座が大乗院方にまで活動を展開することができたのであり、また、その熾烈な受注争いは、彼らの置かれた境遇が次第に厳しさを増していたことを物語るといえる。

実体をともなう中世的な絵所座の崩壊は、15世紀の大和国内の内紛と16世紀の外部勢力の大

和侵入によっていかんともしがたく、中世末期には、興福寺両門跡が絵所を従属させる力はずでになかったと考えられる。他方、16世紀末には、中世絵所の系列と異なる竹坊のような絵屋の出現も見られ⁽⁴¹⁾、絵所は、従来の仕事の他に、独自に生計の道を模索する必要が生まれていた。

こうした、衰退期の南都絵所を物語る際、気になるのが、右方と左方という語であろう。先にも述べた春日大社の天文21・22年（1552・53）「絵馬板」4面の墨書銘から、15世紀中頃には、南都絵所を左方と右方と分けて認識していることがわかるが、その後もこの呼称は長く使用されていたらしく、恵心院本に1点だけ含まれる左方絵所粉本（目録3）は、元和5年（1619）の年紀を持っている。芝座においても、右方の語は天正8年（1580）（目録2）以後少なくとも慶長14年（1609）（目録21）まで使用されたことが確認でき、逆に、古い粉本には見られない。そして、元和期に「南都左方絵所」と称するのは、岡村大藏という絵師であり、中世以来の南都絵所座とは異なる系列と思われる絵師が登場している。継続する南都絵所の再編の結果、従来の一乗院方、大乘院方という編成は解体し、右方左方の語を継承する何らかの基準で再編されるに至った可能性をうかがわせる。南都絵所が衰退して実体を失ったとしても、なお絵師にとってその名は、重要な経営資源であったのであろう。

〈恵心院本の留書〉

『多聞院日記』には侍従や、琳賢に関わる記事があるが、その中には画作についての記事も多い。例えば、天正13年（1585）3月25日条・12月15日条・同19日条には、道空の忌日あるいは大乘院尋憲の葬儀に資するため、観深に対し十三仏図制作が依頼されているし、天正5年（1577）10月22日条・同9年（1581）11月5日条・同13年（1585）10月18日条では観深が地藏



尊像を誂えたことを記すほか、天正6年（1578）9月13日条・同15日条・11月29日条・同8年（1580）2月11日条・9月7日条・同9年（1581）9月10日条・10月9日条などに観深への阿弥陀像の制作依頼があったことを示す記事がある。加えて、天正18年（1590）8月5日条には、観深と弁才天像制作に関する記事もみえる。粉本の中にも、阿弥陀如来像（目録2・30・33・35・41・43）、十三仏図（目録3・5・13・19・31・33）、地藏菩薩像（目録10・23・26・40・41・42・44）、弁才天像（目録3・4・6・9）の図像があり、院家に奉仕する絵所が、祈祷本尊や追善供養のためしばしば描いたこれらの画題⁽⁴²⁾から、16世紀の芝座絵所の仕事の有様をうかがうことができるだろう。中将琳賢は天正16年（1588）11月16日条に見るとおり長谷寺本尊を描いたことが知られているが、天正20年（1592）の「十一面観音像（長谷寺式）」（目録14）は、その粉本を継承するものと考えられる。芝座の仕事の具体的な痕跡といえよう。

このほか、粉本の墨書は、様々な情報を教えてくれる。たとえば、「天文五年申十一月日／ユウセン上人」との墨書のある

14 十一面観音像（長谷寺式）



23 地藏菩薩像



27 地藏菩薩像



28 地藏菩薩像



26 阿弥陀三尊来迎図



33 阿弥陀三尊来迎図



22 聖観音像

「毘盧遮那如来像」(目録34)は、署名はないが、その制作時期から琳賢観重のものと考えてよい。ちょうど「東大寺大仏縁起」を完成した直後の、祐全からの依頼であったことがわかる。時はちょうど祐全が西国勧進を企て、周防大内氏と連絡をとる時期であり⁽⁴³⁾、この図像は、東

大寺再興勸進の為の制作に関わるものと考えてよいだろう。また、興味深い資料としては、天文18年4月に筒井家から観重に依頼された「阿弥陀三尊像」(目録11)がある。これは官符衆徒棟梁で一条院方であった筒井家の順昭からの依頼と思われ、その子順慶が3月3日に生まれた直後の制作である。翌年順昭は病没することを思えば、その制作の意図が推し量られるとともに、筒井氏からの依頼を受ける芝座の南都絵所における位置をうかがわせる。

憲海の書写した粉本の中には、恵心院本以外にも、侍従観深に関わるものがある、高山寺方便智院において慧友僧護のもとで閲覧した「春日若宮神像」⁽⁴⁴⁾の画軸の模本である。この軸には裏書のようなものがあつたらしく「本云／天正九年八月一日右方芝喜多坊侍従観深／山之上發心院六月廿八日ニ御夢想／御覧シテ如此被書セ候／春日御供所ノ前ニテノ事ニテ候」と留書がある。興福寺発心院は現在の高畑山ノ上にあつた子院で、玉林院ともいい大乘院方に属していた。芝座が多聞院に限らず、他の大乘院方の仕事をも受けていたことを教えてくれる。

近世初頭の芝座の動向について、興味深いのは、慶長14年(1609)5月及び9月の年紀を持つ中将観英の粉本である。大坂城の五泉坊の依頼により制作した十三仏図2点(目録10・32)と、大坂城茶会のために誂えられた文殊菩薩普賢菩薩像1点(目録21)は、豊臣方の依頼によって制作されたものと思われ、具体的に芝座の活動がうかがえる資料としては、最も時代の下るものである。

この頃、興福寺及び両門跡の寺領は、文禄検地によって大きく没収され、かつて興福寺の力を背景に大和を治めていた筒井氏も、徳川家康方に組することによって、所領を保持する有様で、経済的にも政治的にも、興福寺の勢力は衰退していた。

一乗院方のみならず大乘院方の絵事にも関わり、中世絵所座としては最大の勢力となったと考えられる芝座にとっても、状況は深刻化する一方であつたと思われる。観深の時代には、まだ、興福寺の他に、東大寺や四天王寺や高野山など他山の絵事に関わることで、経営の余地はあつたようだが、観英の時代になると、広く仲介者を求め、顧客を拡大するほかない状況であつたのだろう。絵所の看板のみは依然許されていたが、一般の絵仏師と何ら変わらぬ存在であり、そうした活動状況そのものが、絵所の衰退ぶりをうかがわせる。それは機構であつた芝座が、機能である芝派への変身を余儀なくされる歴史であつたと思われる。

〈恵心院と恵心院本〉

恵心院本模本に遺された墨書は、原粉本の墨書記事の写しと書写日付と署名と捺印によって構成される単純な構造のものが多い。これだけの点数がありながら、中間に位置する模本や所蔵者を記したものがないため、恵心院が所蔵していた原粉本からの模写と考えてよいと思う。ただ、これらは、実際には恵心院で模写されたものではなかつた。嘉永3年2月5日に模写した「阿弥陀三尊像」(目録11)に「於皇都室町通高辻上ル山王寺」と記されているので、洛中の山王寺で模写したことがわかるためである。従つて、この時、寺外に持ち出されていたことは間違いない。その後、無事恵心院にこれらの粉本が戻つたのか確認するすべはないが、現在の恵心院にこれらの原粉本が存在しないことから、幕末以後、散逸の道をたどつた可能性が高い。恵心院の伽藍は明治大正期に縮小しており⁽⁴⁵⁾、什物の運命も推し量ることができる。

恵心院については先にその歴史を概観したが、18世紀も後半になると徳川家との関係も希薄

となり、上林家の衰退によりその後ろ盾も力強さを失っていた。江戸時代後期には相当に困窮していたと思われ、天保14年（1843）、弘化2年（1845）に什物開帳をして寄付を募っている⁽⁴⁶⁾。憲海の書写にやや先行しているので、この開帳を期に、伝えられた恵心院本の寺外流出の契機が生まれたのではないと思われる。

それでは、なぜ芝座の粉本が恵心院に遺されたのかという問題がある。もとより、恵心院は開山の良泉以来真言宗の寺であり、南都や興福寺と直接関わることはなかった。近世初期、恵心院に絵仏所が置かれた形跡もなく、周辺においてわざわざ南都の絵師が関わるような造仏が行われることもなかった。恵心院と芝座の直接の接点は見いだせない。しかし、恵心院が白川金色院の乗琳坊とその開院当初から関わりを持ち、17世紀には蔵坊をその管理下に置いたことからすれば、金色院との関わりの中で、南都絵所の図像を入手する機会がなしいとはいえなかった。先にも述べたとおり、金色院諸坊が中世には興福寺と何らかの関わりを持っていたことがうかがえるし、『多聞院日記』天正15年（1587）6月17日条には多聞院主英俊より宇治白川蔵坊の般若妙光に茶用の壺を送っている記事もある。芝座と関わりが深い多聞院と白川金色院それも後に恵心院が兼帯する蔵坊が関わっていたことは、南都絵所から恵心院へと伝えられる粉本に細々とした道が繋がっていることを教えてくれる。

恵心院の整備は、延宝4年（1676）の本堂造営を以て盛期を迎える。恵心院良攸が寛文13年（1673）に記した勸進状⁽⁴⁷⁾を見れば、この頃までに、その由緒も確立したと思われ、一連の活動の中で、什物の収集も行われたと考えられる。たとえば、現在も恵心院に遺る「阿弥陀如来画像」には、18世紀初頭に良純によって記された由来記⁽⁴⁸⁾があるが、由緒と什物との結びつきを意図的に作り出した様子が見える。こうした什物の収集は、新興の祈願寺であるがゆえに、寄進者の感心を得るため、避けられないところがあったのだろう。その過程で、粉本図像が南都から持ち込まれた可能性を考えている。粉本の中には阿弥陀如来像が6点含まれているが、金色院と関わりが深い文殊像や辨財天像も比較的多く含まれている。粉本の移動に蔵坊がどのような役割を果たしたかについては、不明な点が多いものの、恵心院と南都絵所の接点として、金色院以外は想定できない。

芝座は元禄期まではその命脈をたもっていたとされるが⁽⁴⁹⁾、これらの粉本は貴重な財産であったはずで、17世紀の初頭で途絶えた粉本の移動は、中将観英の死と関わりがあると見なければならぬ。どこかに、粉本の移動を促す個性が存在した可能性がある。この時期は、興福寺と南都絵所との関わりは希薄になっていたものの、恵心院は伽藍と由緒を確立する精力的な活動期を迎えていた。結果として、解体した南都絵所の粉本を伝えた恵心院の果たした役割は大きい。

〈憲海と恵心院本〉

先にも述べたとおり、恵心院本模本は、洛中の山王寺で模写された。山王寺というのは、京都市下京区室町通仏光寺下ルにあった山王神社の別当天台宗山王寺総持院のことである。明治維新後廃寺となり、現在は日吉神社が同地に残るのみだが、かつては延暦寺の別院として、天台座主によって山王祭の宵宮行事が執行された場所といわれる⁽⁵⁰⁾。

憲海の山王寺での活動は弘化4年（1847）から嘉永3年（1850）ころまで続く。亀福院を去

った後、畿内に入った憲海であったが、自ら退いた豊山をたよることはできなかつたらしい。どのようなつてがあって、天台宗の山王寺に寄寓することになったかはわからない。ただ、好みのある絵師長谷川家が、近接するこの寺への滞在を仲介した可能性⁽⁵¹⁾や、憲海が天台宗の高僧の寿像を描いていることから⁽⁵²⁾、その助力を受けた可能性を想像するばかりである。この時期は能満院の仏画工房を開く前の準備期間にあたり、憲海・大成・現光⁽⁵³⁾の三人で300枚を超す粉本を作り出している。後の能満院工房の財産となる粉本はこの時著しい充実をみせ、恵心院本模本はその一角をなしたのである。

先に長谷寺能満院所蔵の「天川弁才天曼荼羅図」に触れた。中世において長谷寺は興福寺の末であり、大寺ゆえ、独自の絵所も持っていたが、再建などの大事業にあっては、南都絵所が大絵師職を受けることがあった。文明4年(1472)吐田座の琳賢正有がその絵師職を要求したこと⁽⁵⁴⁾は、背景にこうした慣習があったからである。天正16年(1588)11月16日にまだ年若の中將琳賢が長谷寺本尊を描いている。これは誰の依頼かわからないが、粉本の存在なくしてはできないことであり、能満院の天川弁才天曼荼羅図の存在とともに、中世において、南都絵所と長谷寺の間には、浅からぬ関わりを持ち続けていたと考えられる。

こうした歴史を持つ長谷寺で、憲海は青年期、研鑽を積んでいたのだから、すでに歴史のあなたの存在ではあったが南都絵所について、耳にすることも、目にすることもあったはずである。山王寺で積極的な図像収集を行ううち、南都絵所の粉本の存在を知った憲海が、かつての縁に思いを馳せるとともに、研究の対象として強い関心を持ったことは、きわめて自然ななりゆきであった。

憲海はその後、嘉永4年(1851)頃六角堂能満院に移り、仏画工房を主宰する。図像の収集につとめる一方で、収集した図像をもとに、本画の制作のみならず、版によってその頒布をはかり⁽⁵⁵⁾、正統な図像の普及につとめるようになるのである。恵心院本模本には、憲海らによって新たな図がおこされた痕跡をとどめたものがあり(目録6・8・14・25)、ここには収録していないが、田村宗立旧蔵仏画粉本の中には、憲海の弟子大成が恵心院の図を参考に書き起こしたという「十一面観音像」⁽⁵⁶⁾も遺されている。この恵心院本模本が、憲海たちの創作の源として大いに有益であったことは、間違いない。憲海たちは、粉本を通じて、南都絵所の末裔となったのである。

〈注〉

- (1) 田村 宗立(たむらそうりゅう) 1846-1918。丹波国園部に生まれる。京都で大雅堂清亮に南画を学び、能満院の大願に従って仏画を描くが、写真に接し、洋画を描くようになる。1880年京都府画学校の創立に出仕し、西宗の教員となり、1889年明治画学館を設立。1901年関西美術会の結成に参加するなど、関西洋画界の草分けとして活躍。晩年は月樵の号で日本画を描いた。能満院の旧蔵品は、最終的には田村宗立が保管していたが、彼の死後遺族により、絵画に関するものを画学校の後身にあたる京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)に、図書文書類を京都市東山区智積院に寄贈した。
- (2) 京都市立芸術大学芸術資料館編『仏教図像聚成—六角堂能満院仏画粉本』(2004年3月、法蔵館)。
- (3) 紫雲山頂法寺は、京都府京都市中京区にある天台宗の寺院。聖徳太子の創建といわれ、本尊は如意輪観音。西国三十三箇所第18番札所。中世以後町堂としても機能した。本堂が六角形であることから、六角堂の名で知られ、本坊にあたる池坊が執行として代々経営に当たった。能満院は境内の西北に位置したが、現在

その痕跡はない。

- (4) 福島県会津若松市にある八角神社（やすみじんじゃ）は、大同2年（807）創建の古社で、中世に葦名氏が領主となって以来歴代藩主の庇護を受けており、その別当寺である亀福院は高野山心南院末であった（『新編会津風土記』第1巻、260頁。1999年1月、歴史春秋出版株式会社）。維新後廢寺となり、現在は八角神社のみ遺る。
- (5) 弘仁山蓮光院は京都市中京区にある高野山真言宗の寺院。北向き不動の通称で呼ばれる。隣接する墓地に大願憲海の墓塔がある。
- (6) 文化5年（1808）序、斎藤彦麻呂『図畫考』は、近世末期の芝派に関する知識を整理している。森末氏はこれら近世の画史を誤認として批判したが、『丹青若木集』を引用したことによる吐田座琳賢の事跡の混入を除けば、芝派の系図を示した意義は少なくない。参考として、坂崎坦「日本絵画論大系 3」（1980年1月、名著普及会）により、収録しておく。

芝氏系圖

芝法眼琳賢－侍從－琳賢

芝法眼琳賢

東大寺縁起三卷、詞寺務公順、繪芝法眼琳賢、東大寺縁起古來所記爲二十卷、而依事繁多見者闕之、聞者倦之、仍鈔至要縮爲上中下三卷焉、於上卷之詞者辱被染宸翰訖、披閱之輩發修造之志者足矣、于時天文五年月日勸進沙門祐全。

若木集云、琳玄者南都宅間氏之末葉也、傳家學精佛像、圖長谷觀音堂扉於四天像、并在東大寺古縁起五卷、然作三卷琳玄圖之云々、畫圖未監視之、後敍法眼、有二子、第二子者號玄海上人、初瀬本願云々、琳玄慶長年中死。

東大寺大佛縁起〔外題後奈良院、詞同帝尊公順〕 雲中天神〔詞政家公〕 諸佛畫

芝侍從

琳賢之嫡、傳父之風格畫佛像有功。〔若木集、便覽〕

多門院日記云、南都繪所侍從、天正十四年十月十五日條下に出、高野金堂の柱の繪を畫く事あり。

芝琳賢〔侍從子〕

多門院日記云、天正十六年十一月十六日、侍從子琳賢長谷寺にて本尊書候て見せに來る、抑見事無比類也、當年十三歲歟、凡奇特事也と高野衆各稱美して權者也と申すと。

按に、便覽慶長中死とあるは此人なるべし。

芝觀深

〔河内佐太神庫〕天神縁起 小島先 都像。

- (7) 収蔵文書調査報告書1『「白川金色院」と恵心院』（1998年3月、宇治市歴史資料館）。
- (8) 『「白川金色院」と恵心院』（前掲注7書、10頁）。
- (9) 『「白川金色院」と恵心院』（前掲注7書、39頁。慶應4年（1868）閏4月、恵心院文書114。）
- (10) 『「白川金色院」と恵心院』（前掲注7書、15頁。慶長5年（1600）2月、恵心院文書85。）
- (11) 『古代・中世の史料にみえる白川』（前掲注7書、5頁。原本宇治市地藏院蔵。）
- (12) 『古代・中世の史料にみえる白川』（前掲注7書、4頁。『大日本仏教全書』第119冊。）
- (13) 『「白川金色院」と恵心院』（前掲注7書、15頁。慶長2年（1597）3月、恵心院文書84。）
- (14) 『「白川金色院」と恵心院』（前掲注7書、12頁。）
- (15) 森末義彰『中世の社寺と芸術』（第二部第一篇 南都絵所）（1941年11月吉川弘文館）、305-425頁。初出は「中世における南都絵所の研究（一）（二）（三）」（『美術研究』第39・40・41号、1935年3・4・5月）。吐田座の祖有尊は京都から南都に下った巨勢派の絵師であり、その名に有の字を持つことが多い。助座はその庶流であり、一乘院方に属した。また小南院座の祖は尊智とされ、同じく京都から南都に下った絵師で、

- 名に尊の字を持つことが多い。中世、特に鎌倉期の南都絵所座については平田寛『絵師の時代－研究編』第3章第1節南都繪師 (1994年2月、中央公論美術出版) 125-136頁にも、整理されている。
- (16) 興福寺大乗院門跡尋尊の日記。宝徳2年(1450)から永正5年(1508)までの記録がある。『続史料大成』26-37、臨川書店)
- (17) 大河内知之「南都絵所座の後裔－中世末期から近世初期にかけての南都の絵画の動向」(『仏教史研究』第34号、1998年4月、龍谷大学仏教史研究会)。
- (18) 森末氏前掲注15書、352-356頁。氏が琳賢を吐田座の絵師と考えた理由としては以下のようなものが挙げられている。吐田座に琳賢房正有という絵師がいたが、彼が文明5年に亡くなり、その子供春松丸が、その名を継承したと思われることから、琳賢の名が世襲の対象となったと考えたこと。また、大乗院方に属する多聞院英俊によって記された『多聞院日記』に天文期活動する琳賢や侍従に関わる記事が表れるにもかかわらず、彼らを一乗院方の芝座の絵師であることをうかがわせるような記述をしていないこと。
- (19) 続々日本絵巻大成 伝記・縁起篇6『東大寺大仏縁起・二月堂縁起』(1994年8月、中央公論社)
- (20) 芝助座の藤勝丸の記した南都東大寺絵所職の記録。天文4年(1535)から元亀3年(1572)まで断片的に記録される。『続々群書類従 第5記録部』、1969年9月、続群書類従完成会)
- (21) 小松茂美「天文年中における東大寺の絵巻づくり」(注18前掲書収録)、164-165頁。
- (22) 河原由雄氏は、「祐全と琳賢」(『南都仏教』第43・44号、1980年9月)においては、琳賢を吐田座の絵師として論を進めているが、「南都絵画の絵かきたち(一・二章)」(『奈良市の絵画』1995年3月、奈良市教育委員会)においては、琳賢を芝座の観重とする見解をとっている。
- (23) 土井実『奈良県史 17 金石文(下)』(1987年10月)53-55頁。
- (24) 奈良市教育委員会『奈良市の絵画』1995年3月、奈良市教育委員会)124頁。河原由雄「祐全と琳賢」(『南都仏教』第43・44号、1980年9月)。156-158頁。
- (25) 森末氏前掲注15書、355-356頁。
- (26) 渡辺里志「芝琳賢の涅槃図と図像の源流－愛知・妙伝寺本と奈良・唐招提寺本」『美学美術史研究論集』第20号(2002年)
- (27) 「特別展 ひょうご 仏教絵画巡礼－指定文化財と優品をたずねて」(1996年7月、兵庫県立歴史博物館)91-92頁。
- (28) 興福寺大乗院方の子院多聞院主英俊らの日記、文明10年(1478)から元和4年(1618)の記録がある。(辻善之助編『多聞院日記』(1967年11月、角川書店))。
- (29) 河原氏前掲注20論文。167頁。
- (30) 河原氏前掲注20論文。169-170頁。渡辺氏前掲注24論文。35-38頁。
- (31) 近時望月玉蟻以後望月家累代所蔵粉本(望月重延氏所蔵)中に、観英自筆と思われる粉本(孔子敬器図)を閲覧する機会があった。その留書は「慶長四年己亥九月吉日南都繪所芝喜多坊中将公観英(花押)」とあり、憲海が恵心院本から「本云」として書き写した墨書と同様の書式を見せており、憲海は原本に忠実に書き写した可能性が高い。
- (32) 『京都・永観堂禪林寺の名宝』展図録(1996年4月、同展図録作成委員会)、167-168頁。
- (33) 森末氏前掲注15書、356-357頁。注6、大河内氏前掲論文、54-55頁。「尋憲記」は興福寺大乗院門跡尋憲の日記。永禄5年(1562)から天正5年(1577)の記録がある。国立公文書館に写本あり。
- (34) 恵心院本の中に永禄元年(1558)4月5日の年紀を持つ「阿弥陀三尊來迎図」(目録26)がある。「喜多坊本」とあるだけで、作者を確定しえないが、観深の活動期としてはやや早いことと、署名をしない傾向が観重に多いことを考えると、観重の作である可能性がある。だとすれば観深の活動期は今少し延びると思われるが、それでもなお元亀3年は14年後である。
- (35) 森末氏前掲注15書、322-323頁。『奈良六大寺大観 第八巻 興福寺 二』(1970年12月、岩波書店)、解説44-46頁。
- (36) 東京国立博物館ほか「天神さまの美術」展図録(2001年7月、NHKほか)、282頁。
- (37) 朝岡興禎／太田謹『増訂古画備考 三十二』(1904年6月)「芝」の段。芝法眼尊海、芝法眼、芝三河法眼観深、芝法眼慶舜、芝法眼、芝法眼琳賢、芝侍従、芝琳賢(侍従子)の項がある。
- (38) 蔵田蔵『秘宝 第四巻 東大寺 上』(1969年11月、講談社)、351-352頁。『奈良六大寺大観 第十一巻 東大寺 三』(1972年2月、岩波書店)、解説65-66頁。

- (39) 森末氏は賢舜を觀英琳賢の子としているが（前掲注15書、358-359頁）、この年20歳の觀英の年齢を考えるとこれは觀英の弟と見るべきであろう。『多聞院日記』には「琳賢子息十七才」とあるが、本論にも述べたとおり、琳賢は家の名として用いられた可能性もあるので、矛盾を生じない判断をとりたい。また、この法諱からすれば賢舜は絵所には属さなかったと思われる。従って、觀英の後継は不明である。
- (40) 森末氏前掲注15書、347-348頁・362-365頁・367-369頁。
- (41) 『奈良市の絵画』前掲注24書、95-98頁。
- (42) 森末氏前掲注15書、387-390頁。
- (43) 河原氏前掲注21書、152頁。
- (44) 前掲注2書下巻、資料番号4005。
- (45) 「恵心院の建造物」（前掲注7書、40-43頁）。
- (46) 『宇治市史3』（1976年、宇治市役所）467頁。史料は宇治市役所文書『宇治郷留日記』。
- (47) 「〔白川金色院〕と恵心院」（前掲注7書、22頁。恵心院文書176。）
- (48) 「〔白川金色院〕と恵心院」（前掲注7書、22-23頁。恵心院文書177。）
- (49) 森末氏前掲注21書、370頁。
- (50) 山王寺については、秋里籬島『拾遺都名所図会』巻1「山王社」（天明7（1787）年刊）、碓井小三郎『京都坊目誌』下巻第十一学区之部「山王神社」（大正5年（1916））に記事がある。
- (51) 長谷川家は烏丸仏光寺下ルにあり、山王寺のほぼ東側にあたる。長谷川等叔は憲海も関わった文政12年（1829）「長谷寺版両界曼荼羅」開版事業で画工をつとめており、会津亀福院から上洛した憲海は山王寺に寄宿する直前、この長谷川家を訪れている。山王寺寄寓の時期、憲海らは長谷川家の粉本を多数模写しており、親交の深いことがうかがえる。
- (52) 憲海筆「額足院某僧像」（前掲注2書下巻、資料番号3075）に「天保十一庚子正月下旬／山門額足院様御肖像／無言藏写」とあり、天台僧の寿像を描いている。
- (53) 現光については、全く伝記を欠く。憲海が会津亀福院を去って、畿内に入る際、関東より同行したらしい。その手になる模本を見れば、かなり高い技術を持っていたことがわかる。現光に関わる粉本は約150点含まれており、弘化2年（1845）に江戸で模写したと思われる2枚を除けば、弘化4年（1847）から嘉永6年（1853）までの7年間の書写に限られている。その6割は弘化4年から嘉永2年までの3年間で集中的に書写される。全体の三分の一には近隣の絵仏師長谷川家粉本からの模写であることが墨書されていて、これはこの時期の憲海、大成の行動と等しい。現光は、憲海と大成が能満院に移った後は、行動を別にした形跡があり、東国からの画作も受けていたらしい。その仕事の受託状況から見ると、もともと、関東に縁のある画僧ではなかったかと考えている。嘉永6年5月以後、その消息は不明で、亡くなった可能性もあるが、墓を伝えていないことからすれば、むしろ畿内を離れたのではないかと考える。従って、彼は能満院の画僧の中には入らない。
- (54) 『大乘院寺社雑事記』（前掲注15書）文明4年（1472）4月10日条。
- (55) 拙稿「田村宗立旧蔵仏画粉本における仏教版画について」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報14』2005年3月、京都市立芸術大学芸術資料館）
- (56) 大成筆「十一面観音像」、紙本白描、まくり、1枚。71.2×29.6cm、嘉永3年2月13日写。墨書に（右下墨書）嘉永三庚戌／二月九日下繪作り初同十三日二絹地エ下繪付了大成蔵）依宇治恵心院蔵本ノ十一面觀音様ニ縮写之但シ非基ノ目割故ニ不宜／清書不至直ニ下繪至也／故ニ一本也）智山智恵法印様御詠也）画料金壹歩也）（左下墨書）御面手足御身連續至者歟不至者歟／不未也）（右上裏墨書）十一面」とある。

恵心院本模本仏画粉本目録

*目録通番、形状、員数、法量（センチメートル）、材質技法、
作者、筆写日、「仏教図像聚成」の図録番号、墨書、印影

- 1 五髻文殊菩薩像 まくり 1枚 71.8×38.8 紙本白描
 憲海 嘉永3年（1850）1月28日 聚成-2057
 （右上裏墨書）文殊菩薩／獅子乗」嘉永三庚戌正月廿八日」以宇治恵心院本／芝喜多坊琳賢
 筆写」無言蔵」

- 2 子島荒神像 まくり 1枚 53.0×38.4 紙本白描
 憲海 嘉永3年（1850）1月28日 聚成-4092
 （右上裏墨書）小嶋荒神」本云天正八辰十月十八日右方芝絵所喜多坊観深筆」以宇治恵心院
 本写之」嘉永三戌正月廿八日／無言蔵」

- 3 愛宕権現像 まくり 1枚 74.8×38.6 紙本白描
 憲海 嘉永3年（1850）1月29日 聚成-4084
 （左上裏墨書）愛宕山」本云元和五年吉日南都左方絵所岡村大藏」嘉永三戌正月廿九日／以
 宇治恵心院藏本写之／無言蔵」

- 4 地藏菩薩像 まくり 1枚 69.7×27.5 紙本白描
 憲海 嘉永3年（1850）1月30日 聚成-2108
 （左上墨書）弥陀釈迦地藏」（右上裏墨書）弥陀釈迦地藏秘尊」嘉永三戌正月晦日／無言
 蔵」以宇治恵心院本写之」本云／天文七年戌二月廿日芝喜多坊」

- 5 十三仏図 まくり 1枚 112.4×48.8 紙本白描
 憲海 嘉永3年（1850）2月 聚成-1185
 （右上墨書）本云／文禄三年午正月吉日／右方喜多坊琳賢」（右上裏墨書）十三佛／愛染
 附」以宇治恵心院本写之」嘉永三戌二月日／無言蔵」
 （朱文朱円印）無言蔵」

- 6 辨才天像 まくり 1枚 57.5×38.7 紙本白描
 憲海 嘉永3年（1850）2月1日 聚成-2211
 （左上裏墨書）辯才天」以恵心院本写」本云／天文未五月吉日」嘉永三年戌二月一日無言蔵」

- 7 十三仏図 まくり 1枚 98.2×41.3 紙本白描
 憲海 嘉永3年（1850）2月3日 聚成-1183
 （右上裏墨書）十三佛／彌陀中尊」嘉永三戌二月三日／無言蔵」以宇治恵心院本写之」本

云／天文廿二年／卯月廿三日／芝喜多坊觀重」
(朱文朱円印) 無言藏」

- 8 毘沙門天吉祥天善賦師像 まくり 1枚 113.0×60.0 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月3日 聚成-2199
(右上裏墨書) 毘沙門天」吉祥天／禪尼子」本云／天文廿二丑三月三日喜多坊本」嘉永三戌
二月三日以宇治惠心院本写之／無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」
- 9 嘉祥大師吉藏像 まくり 1枚 63.9×46.3 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月3日 聚成-3012
(右上裏墨書) 嘉祥大師」以惠心院写本写之」嘉永三戌二月三日／無言藏」
(重郭朱文朱方印) 王城中眞六角堂／頂法寺内能満院」
(朱文朱円印) 無言藏」
- 10 十三仏図 まくり 1枚 152.7×86.9 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月4日 聚成-1187
(右上裏墨書) 大」十三佛／以宇治惠心院本ヲ写也／嘉永三戌二月四日／無言藏」永禄八丑
九月／喜多坊觀深」慶長十四酉年五月大吉日／南都芝之繪所喜多坊中将琳賢／觀英」
(朱文朱円印) 無言藏」
- 11 阿弥陀三尊像 まくり 1枚 113.7×63.8 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月5日 聚成-1128
(右上裏墨書) 阿弥陀／觀音／勢至」本云／筒井殿へ書之觀重法眼天文十八年戊卯月十三日
出来」右以宇治惠心院本写之嘉永三年戊二月五日／於皇都室町通高辻上ル山王寺」無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」
- 12 阿弥陀如来像 まくり 1枚 100.1×38.1 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月5日 聚成-1133
(右上裏墨書) 阿弥陀」本云琢磨法眼筆写天文八年五月吉日／芝法眼喜多坊」宇治惠心院藏
本写之」嘉永三戌二月五日／無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」
- 13 文殊菩薩善財童子像 まくり 1枚 82.0×27.6 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月5日 聚成-2067
(右上裏墨書) 文殊菩薩」本云／天正十九年後正月八日中将」宇治惠心院本写之」嘉永三戌
二月五日無言藏」

(朱文朱円印) 無言藏]

14 十一面観音像 (長谷寺式) まくり 1枚 148.5×72.0 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月5日

(右上裏墨書) 長谷寺/十一面観世音菩薩/春日大明神/天照皇太神」本云/天正廿年二月吉日喜多坊」右宇治惠心院藏本写得之」嘉永三戌二月五日/無言藏]

15 地藏菩薩像 まくり 1枚 95.0×38.4 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月5日 聚成-2104

(左上裏墨書) 地藏菩薩」本云/慶長廿年卯六月吉日/南都芝繪所喜多坊中将觀英/〈花押〉」以宇治惠心院藏本写之」嘉永三戌二月五日無言藏]

(朱文朱円印) 無言藏]

16 辨才天像 まくり 1枚 85.4×38.3 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月5日 聚成-2210

(左上裏墨書) 辨財天」本云/天正十年午八月大吉日/右方芝喜多坊觀深是ヲ作ル」以宇治惠心院本写之嘉永三戌二月五日/無言藏]

(朱文朱円印) 無言藏]

17 渡海文殊菩薩像 まくり 1枚 112.5×46.4 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月6日 聚成-2069

(右上裏墨書) 文殊菩薩/使者附」本云/天文十年丑六月廿日モンクワンノ筆也/喜多坊」右宇治惠心院藏本写得之」嘉永三戌二月六日/無言藏]但シ校合スベシ手本紛本ノ故ニ」

(右墨書) 八幡」 (左墨書) 春日」 (左下墨書) 善財童子」

(朱文朱円印) 無言藏]

18 阿弥陀如来像 まくり 1枚 77.9×38.4 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月7日 聚成-1136

(右上裏墨書) 阿弥陀立像」本云/東大寺念佛堂新禅院本尊ニ書之」永正十四年丑五月十九日芝喜多坊觀重法橋」宇治惠心院所藏本写之」嘉永三戌二月七月初午無言藏]

(朱文朱円印) 無言藏]

19 十三仏図 まくり 1枚 112.6×43.2 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月8日 聚成-1186

(右上裏墨書) 十三佛/地藏中尊」本云天正十九年正月日/喜多坊琳賢」宇治惠心院藏本写之」嘉永三年戌二月八日/無言藏]

(朱文朱円印) 無言藏]

- 20 高野四社明神図 まくり 1枚 107.0×38.0 紙本白描
 憲海 嘉永3年(1850)2月8日 聚成-4053
 (上裏墨書)高野四所明神」本云天正廿一年壬辰二月吉日／芝絵所喜多坊觀深／慶長七年寅六月吉日南都芝絵所右方喜多坊中將觀英」宇治惠心院藏本写之」嘉永三庚戌二月八日無言藏」
 (朱文朱円印)無言藏」
- 21 文殊菩薩普賢菩薩像 まくり 1枚 38.0×49.1 紙本白描
 憲海 嘉永3年(1850)2月9日 聚成-2072
 (右上裏墨書)文殊普賢」(上裏墨書)本云／慶長十四年酉九月吉日大坂御城ノ茶ノ湯被成候節御詔ニテ」右方南都芝之絵所喜多坊中將公觀英」嘉永三戌二月九日無言藏写之」宇治惠心院所藏本ニ有之」
 (朱文朱円印)無言藏」
- 22 聖觀音像 まくり 1枚 42.8×27.4 紙本白描
 憲海 嘉永3年(1850)2月9日
 (左上裏墨書)正觀世音菩薩」宇治惠心院本写之」嘉永三戌二月九日無言藏」
 (朱文朱円印)無言藏」
- 23 地藏菩薩像 まくり 1枚 104.5×37.8 紙本白描
 憲海 嘉永3年(1850)2月9日
 (右上裏墨書)地藏菩薩」弥陀釈迦地藏」本云芝喜多坊本也」右宇治惠心院藏本写之」嘉永三庚戌二月九日／無言藏」
 (朱文朱円印)無言藏」
- 24 不動明王像 まくり 1枚 44.7×27.5 紙本白描
 憲海 嘉永3年(1850)2月9日 聚成-2131
 (左上裏墨書)不動尊」宇治惠心院本写之」嘉永三戌二月九日／無言藏」
 (朱文朱円印)無言藏」
- 25 兩童子像 まくり 1枚 112.5×44.0 紙本白描
 憲海・宗立 嘉永3年(1850)2月9日 聚成-4019
 (右墨書)續鑛石集上本初ニ云古來ノ傳ニ云帶塔德菩薩也弥勒菩薩ノ異名也」胎藏ノ大日如来ナリ頂上ニ戴キ玉フハ兩部大日ノ三昧耶形即海底ノ大日ノ印文トハ是ナリ」密教擁護ノ天尊ナリ」(左墨書)大師年譜九／十九左」正月十六日往詣勢州朝熊ノ嶽ニ／修ス求聞持ノ法ヲ而有神臨又創／金剛證寺ヲ」朝熊山儀軌其ノ略ニ云天長二年乙巳正月十六日巳刻入朝熊山ニ見堂舎ヲ勿レハ人ノ住柱根摧朽無ク燈油ノ光佛壇闇ク稀ナリ人通云々大師白日嗚呼喜哉今來此ノ山ニ依テ求聞持ノ力奉値大神宮ニ□□拜虚空藏大菩薩ヲ落涙洗滴衣袖ニ誓言

於末世ニ求聞持ノ行者汲〇〇字闕伽井ノ水ヲ／沐浴明星水云々／朝熊ノ嶽ニ有池連珠池ト云□橋連珠橋ト云々大神託メ日ヲテ雨宝童子ヲ可為此山ノ護法ト時ニ御兒ニ八十種好ヲ身ニ著白衣ヲ右ノ御手ニ宝棒ヲ逆手ニシ左ノ手ニ持ス赤色宝珠ヲ云々爾ノ時太神在シ童子ヲ摩頂シ自り口吐五輪ヲ居童子ノ頂上ニ／虚空藏自り御口吐キ白色ノ宝珠ヲ授ク童子ノ額ニ云々」(面貌部貼紙墨書) 文久酉十月十七日十六才宗立藏」(上裏墨書) 雨宝童子」本云／長祿十三年正月吉日芝絵所喜多坊侍従公觀深／御くしの深色と易者ノ詵被申間此本ヲ作り申也」宇治惠心院本写之」嘉永三庚戌二月九日／無言藏」

(朱文朱円印) 無言藏」

26 阿弥陀三尊来迎図 まくり 1枚 149.0×78.7 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月10日

(右上裏墨書) 弥陀三尊」本云／下河内大念佛本尊」永祿元年卯月五日／喜多坊本」宇治惠心院藏本写之」嘉永三戌二月十日／無言藏」

(朱文朱円印) 無言藏」

27 地藏菩薩像 まくり 1枚 131.2×48.0 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月10日

(左上裏墨書) 地藏菩薩」本云天文廿三寅六月十一日喜多坊」宇治惠心院藏本写得之」嘉永三年戌二月十日無言藏」

(朱文朱円印) 無言藏」

28 地藏菩薩像 まくり 1枚 79.6×27.5 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月10日

(右上裏墨書) 地藏菩薩」弥陀釈迦地藏」本云／天正十六年八月吉日中將」宇治惠心院藏本写之」嘉永三戌二月十日無言藏」

(朱文朱円印) 無言藏」

29 地藏菩薩像 まくり 1枚 92.8×37.8 紙本白描淡彩

憲海 嘉永3年(1850)2月10日 聚成-2102

(右上裏墨書) 地藏菩薩」本云／大永四年三月日」宇治惠心院本写之嘉永三戌二月十日／無言藏」

(朱文朱円印) 無言藏」

30 辨才天十五童子像 まくり 1枚 87.1×38.1 紙本白描

憲海 嘉永3年(1850)2月10日 聚成-2216

(右上裏墨書) 此本宇治惠心院藏／嘉永三庚戌二月十日写得之／無言藏」辨才天」十五童子各持如意珠／龍狐含宝珠」本云／天文十四年三月吉日喜多坊」(左上墨書) 海中龍宮ノ宝

珠ト／精進峯ノ宝珠ト冥會不二」

(朱文朱円印) 無言藏」

- 31 藏王権現像 まくり 1枚 88.7×43.7 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月10日 聚成-4050
(左上裏墨書) 吉野藏王権現」本云／天文八年亥二月十九日觀重」右宇治惠心院本写」嘉永三年二月十日／無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」
- 32 十三仏図 まくり 1枚 148.0×64.6 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月11日 聚成-1189
(右上裏墨書) 十三佛」本云／慶長十四酉年五月大吉日大坂御城五泉坊御詔／南都芝之絵所喜多坊中将琳賢觀英」右宇治惠心院藏本写之了／嘉永三庚戌二月十一日無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」
- 33 阿弥陀三尊来迎図 まくり 1枚 82.9×37.9 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月12日
(右上裏墨書) 弥陀三尊」本云／芝絵所喜多坊」宇治惠心院藏本写之」嘉永三戊二月十二日無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」
- 34 毘盧遮那如来像 まくり 1枚 111.7×83.2 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月12日 聚成-1163
(上墨書) 南都大佛殿」 (右墨書) 如意輪觀自在菩薩」 (左墨書) 虚空藏菩薩」 (下墨書) 理趣積／五十／左／佛法ト者是金剛薩埵」疏ニ金剛手即積迦ト故ニ金剛手ヲ為仏宝」法寶ト者觀自在菩薩／僧寶ト者是レ虚空藏菩薩ナリ此ノ三寶ハ者皆ナ従リ毘盧遮那心ノ菩提心中流出亦ハ名ク三法兄弟ト以事ヲ顯理ヲ也」三兄弟ト者是レ梵王那羅延摩醯首羅之異名也／此三天ハ表ス仏法中ノ三宝三身ヲ」胎抄云觀音ハ法宝虚空藏僧宝釈迦ハ佛宝也」虚空藏僧宝ノ事南方ハ西曼荼羅東方曼荼羅コノ中兩部不二也」僧ハ和合ヲ為義ト故ニ南方虚空藏ヲ為僧宝ト也又南方ハ万行ノ方也僧ハ以行徳ヲ為義也」
(右上裏墨書) 大佛殿」三寶本尊」本云天文五年申十一月日／ユウセン上人」右宇治惠心院藏本写之」嘉永三戊二月十二日無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」
- 35 六地藏像 まくり 1枚 112.0×45.7 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月13日 聚成-2115

(上墨書) 修羅道」 (右墨書) 人道」 畜生道」 餓鬼道」 (左墨書) 天道」 地獄道」 (右上裏墨書) 六地藏」 本云／天正九巳十月十八日／芝絵所／喜多坊観深」 宇治惠心院藏本写之」 嘉永三庚戌二月十三日無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」

36 僧形八幡神像 まくり 1枚 112.6×59.8 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月13日 聚成-4012
(右上裏墨書) 八幡大菩薩」 本云／元和元年卯十一月四日芝絵所喜多坊中將」 宇治惠心院藏本写之了／嘉永三庚戌二月十三日／無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」

37 阿弥陀如来像 まくり 1枚 118.7×88.1 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月14日 聚成-1119
(左下裏墨書) 宇治惠心院藏本云芝喜多坊観深」 當麻曼荼羅中尊」 嘉永三戌二月十四日／無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」

38 辨才天十五童子像 まくり 1枚 97.2×46.1 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月15日 聚成-2215
(左上墨書) 左第一宝珠弓輪ホコ」 右劔箭カキ棒」 (左上裏墨書) 辨財天」 宇治惠心院本云／芝喜多坊」 嘉永三年戌二月十五日無言藏」
(朱文朱円印) 無言藏」

39 十三仏図 まくり 1枚 123.2×68.2 紙本白描
憲海 嘉永3年(1850)2月18日 聚成-1184
(右上裏墨書) 十三佛」 宇治惠心院本云永禄八丑九月吉日／喜多坊観深」 嘉永三年戌二月十八日無言藏写」
(朱文朱円印) 無言藏」

